

OECD Education2030 プロジェクトから考える学校教育の未来

白井俊（内閣府科学技術・イノベーション推進事務局参事官）

白井 俊（しらい しゅん）

2000年文部省入省、OECD教育スキル局アナリスト、文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室長、(独)大学入試センター試験・研究統括補佐官、文部科学省国際統括官付国際戦略企画官等を経て、現在、内閣府科学技術・イノベーション推進事務局参事官、国立教育政策研究所フェロー。主著に『OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来』（ミネルヴァ書房、2020年）。

はじめに

白井 皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました、内閣府の白井と申します。私からは、今日は、この OECD Education2030 プロジェクトについてということでお話をさせていただきたいと思っています。今日は、卒業生の先生方を含めて、現場でまさに教鞭を執られていらっしゃる先生方も多いと思いますけれども、話の中では、横文字の言葉がたくさん出てきます。ここにある、エージェンシーという言葉もそうですし、ウェルビーイングとか、コンピテンシーとか、カリキュラム・オーバーロードといったような言葉が出てきます。そこについて、今日は限られた時間ですので、全部をきっちり網羅することは難しいかもしれませんが、普通の授業実践とか、学校運営なんかで、見直す視点が得られる部分があるのかなと思っていますので、どんなものかということを含んで頂ければありがたいかなと思っています。

先ほど、ご紹介いただきましたけれども、私もこれまで、色々な部署にいたんですけども、ちょうど直前のところで、ユネスコの担当をしていました。OECD とユネスコって、どちらもパリに本部がある国際機関です。ユネスコのほうが知名度が圧倒的に高いと思うんですけども。違いがあるのは、OECD は基本的には先進国の集まりです。ユネスコは、世界 193 カ国が今、加盟していますので、色々な国、途上国も含めた色々な国が入っ

ている。それぞれが色々なことを、教育のことを含めて、色々なことやっているんですけども、違うところとしてあるのが、OECD のほうが、先進国が集まっている分、共通課題が非常に見えやすいですね。

ユネスコが関わっていることで、例えば SDGs というすごく有名なスローガンがあります。そういうところでは、もちろん、この SDGs、どの国にとっても大切なんですけども、例えば、中には、明日、食べるものをちゃんと確保しようとか、安全にトイレに行けるようにしようとか、ちょっと日本の今の現状からすると若干、離れたような目標というものもあると思っています。これに対して、OECD が掲げている目標はウェルビーイングなんです。そこでのウェルビーイングというのは、先進国の集まりである OECD が議論をして、こういう方向にもっていきましょう、こういうことが課題ですよということを議論してつくったと。別に、どちらが正しいとか正しくないということじゃないと思うんですけども、日本にとってより密接に考えられるのが、この OECD の議論なのかなというふうに思っています。

では、今日は、五つのチャプターから議論をしていきたいと思うんですけども。まず、第1章、前段です。21世紀型スキルの時代というところから入っていききたいと思います。この

Education2030 プロジェクトそのものに入る前に、その背景を少したどっていきたいと思っています。

1. 「21世紀型スキル」の時代

さかのぼること、10年、20年前になりますけれども、当時、いろいろな提案が出されています。21世紀型スキルためのパートナーシップ、それからユネスコからもESDという提案が、実はこれ日本が提案したものなんですけれども、出ています。OECDから2003年、赤字にしていますけれども、DeSeCoプロジェクトというプロジェクトですね。実はこれ、キー・コンピテンシーを定義したプロジェクトになりますけれども、その最終報告が出ています。他にも、色々な財団とか、国際コンソーシアムなんかから、色々な提案が続々出てきています。そこで、この時代背景を、ちょっとだけ考えていただきたいと思うんです。

2000年、ちょうど21世紀に入って、続々と色々



な教育に関する提言が出てきた。なぜでしょうか。振り返って考えてみると、2000年は、ちょうど私が、まだ省庁再編前の旧文部省に入った年なんですけれども、その頃って、まだ色々な仕事のやり方も非常にアナログでした。例えば、新しい法令を作るといときには、各省庁を物理的に回って、書類を持って説明して、今度、文部省からこういう新しい法令を作ります、これでよろしいですか、ご意見いただきたい、という仕事を、各省に本当に足を運んでやっていました。これをやると、本当に一日がかりで各省庁を回るといった感じでした。

ところが、その後、本当にあっという間に、もうメールとかインターネット中心の仕事に変わっ

ていって、実際に足を運ぶなんていうことは誰もやらなくなった。紙ベースでの仕事が、一気に少なくなるという時代の変化がありました。要は、この時期は、急速にインターネットが普及した時期なんです。われわれの生活、例えばAmazonとか楽天とか、皆さんも使われているかもしれませんが、そういったものも、この時期に急激に発達してきたということがありました。

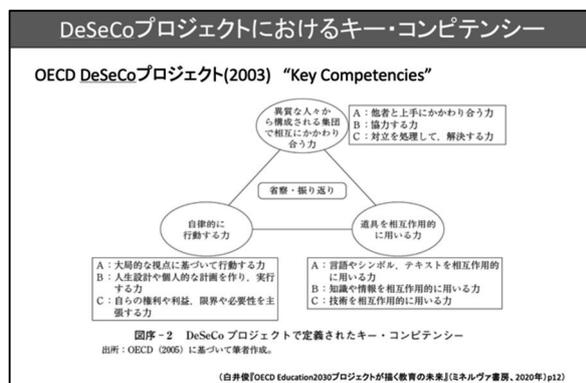
これらの提案というのは、そういったことと軌を一にしている、要は社会が急激に変わってきていると。インターネットが急速に普及していて、われわれの生活様式も仕事のやり方もどんどん変わってきている中で、学校に目を向けてみると、前世紀からあんまり変わってないんじゃないか、ということも多くの方が疑問に思うようになったということなんです。このままでは、まずいんじゃないかということで、実際この中には、IT系の企業なんかも、かなり入っているんですね、MicrosoftとかAppleとか。そういったところも含めて、色々な提案が出てきているんですが、従来の教育のままではまずいんじゃないか、時代の変化に対応できてないんじゃないか、これからの新しい教育が必要なんじゃないか、といった色々な提案をまとめて、ちょうど21世紀になった頃に出た提案なので、21世紀型スキルの提案というふうに呼んでいます。

この内容については、また後ほどご説明したいと思うんですけれども、今日のテーマにも関わるこのOECDの中の議論、赤字にしている、DeSeCoプロジェクト、この中身だけ、ちょっと見てみたいと思います。キー・コンピテンシーという言葉は、聞かれたことがある方が多いかと思えますけれども、実はこのDeSeCoプロジェクトの中で定義された言葉でした。すごく簡単に言ってしまうと、本当は、非常に分厚い本があるんですけれども、この1枚にしてしまうと、異質の人々から構成される集団で、相互に関わり合う力、自律的に行動する力、道具を相互作用的に用いる力。こういった三つの力が大切であって、それを省察、振り返りをしながら使っていくことが大事だということがいわれています。

実はこのDeSeCoプロジェクトは、3年に1回

行っている国際的な学力調査である PISA とリンクした制度設計でした。ちょうど OECD が当時、この PISA を始めようとしていた。ただ、PISA を始めるにあたり、OECD としては、どういう根拠に基づいて、世界中の子どもたちの学力、それも、全然違うカリキュラムを受けている子どもたちの学力を評価するんだ、と問われるわけです。それに対して、OECD としては、自分たちはこういう能力がこれから必要だと思っていて、それらを測定するために作ったのが、PISA という枠組みであるということを説明する必要があった。そのこともあって作られたのが、このキー・コンピテンシーということになります。

ただ、現実には難しいところがあります。今、PISA で測っているのは、読解力とか、数学的思

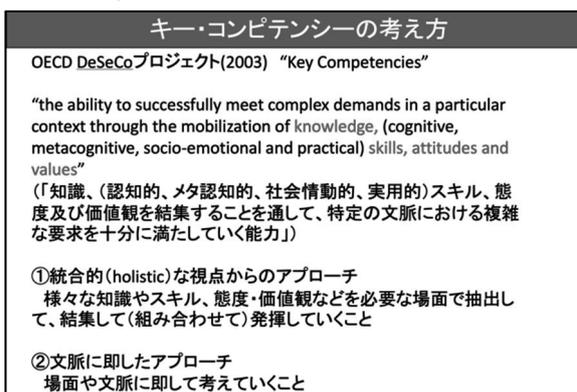


考力とか、そういった力になりますけれども、それはどちらかというところの右側にある、道具を相互作用的に用いる力の部分を測っているということになります。本当は、OECD はもっと全体を測りたいんです。異質な人々から構成される集団で相互に関わり合う力や自律的に行動する力はどうか、測りたいんです。実際、毎回毎回、色々な実験的な調査をやってるんですけども、なかなかそこは難しくて。過去に日本でも、実は日本が1位になった、協働問題解決能力調査というのを、2015年にやったことがありました。実は、日本が1位だったんですけども、なかなか、まだ調査として十分に成熟してないということで、あまり注目されなかったし、OECD 側も苦しんでいて、各国の参加もなかなか得られていないという状況になっています。

さて、次に進みたいと思いますけれども、このキー・コンピテンシーについて、定義が置かれて

います。知識、スキル、態度および価値観を結集することを通して、特定の文脈における複雑な要求を十分に満たしていく能力、として定義されています。今日は、たくさんのスライドを用意してありますが、私は、このスライドが実は、一番大事ではないかと思っています。ちょっと地味な見た目のスライドですけども、何が書いてあるか、ポイントは二つあると思っています。一つ目は、統合的な視点、ホリスティックな視点ということなんです。さまざまな知識、スキル、態度、価値観を必要な場面に抽出して結集して発揮していく、それがコンピテンシーの本質だということが言われています。

英語にすると真ん中の行に「モビライゼーション」という言葉が入っています。Mobilization of knowledge, skills, attitudes and values っていう



ことなんですけれども。モビライズという言葉は、「結集する」とか「組み合わせる」という意味なんです。これ、日本でもよく普通にいうと思うんですけども、知識だけあっても、知っているだけでは、しょうがないでしょう。確かにそのとおりなんです。いくら知識があっても、それだけではコンピテンシーを発揮できるとはいえない。何か知っていて、それにプラスアルファで、例えば態度、相手と交渉するとき、相手に対するリスペクトを示せるかどうかと。あるいはスキル。自分が何か知っていても、それをちゃんと論理的に相手に説明できる、論理的な説明力、論理的な思考力があるのか。それがないと、コンピテンシーとしては機能しない。その、当たり前のことを言ってます。それが一つ目。

二つ目、文脈に即したアプローチ。場面や文脈に即して考えていく。これも当たり前と言えば当

たり前です。英語だと、一番上の行の一番最後のところにありますけれども、“in a particular context”、特定の文脈における、ということになります。これも当たり前でして、どんなに能力が高くても、そこで求められていなければいけません。例えば、大谷選手は、すごくスキルが高いし、態度も資質も素晴らしい方だと思いますけれども、野球の場で非常に活躍してるわけであって、それが、例えばeスポーツだったらどうなのか。場面や文脈に合った力を発揮していかないといけない。以上の二つの要素が、当たり前といえば当たり前なんですけど、コンピテンシーの本質になります。

次のスライドに進んでいきたいと思います。このOECDが出したキー・コンピテンシーなんですけれども、実は結構、影響力がありました。各国のカリキュラムも、どんどんと、これに基づいて変わっていったということがあります。ニュージーランドは、2003年にOECDからレポートが出た後すぐに、また、2007年にはニュージーランドが、その後、オーストラリア、シンガポールもカリキュラムを変えています。特に、ニュージーランドなんか、もう言葉もそのまま、キー・コンピテンシーの育成に取り組んでいくということをカリキュラムのど真ん中に持ってきています。韓国も、例えば、2015年のカリキュラム改革では革新力量という言葉を使っていて、いかにも、キー・コンピテンシーっぽい雰囲気が漂ってきます。日本でも、今の学習指導要領では、資質・能力という言葉を使っています。

ここに共通して言えるのは、従来の教育は、どうしてもコンテンツ中心だったのではないかな。どんなことを扱うのか、どんなことを教えるのかということが中心にあって、どんな力がついたのか、どんなふうに力を発揮できるのかっていうところに対する視点っていうのはちょっと弱かったんじゃないかな。そこを、もうちょっと、コンピテンシー寄りにしていきましょうということだったと思っています。コンピテンシー・ベースのカリキュラムと言われることもありますけれども、そういう方向に今、各国がかじを切ってきているという状況かと思っています。

さて、ちょっと話を戻して、冒頭に21世紀型スキルとして、様々な提案があるということをお伝えしました。その特徴なんですけれども、伝統的なスキル、例えば、問題解決能力、批判的思考力、創造性。こういったものが大事じゃないということは、全くいわれていません。これはもう、昔から大事だし、これからも大事だろうということがいわれています。ただ、その一方で、新しいスキル、ICT、それからデジタル・リテラシーやデータ・リテラシーといったものも必要になってくる。また、ソフトスキルとか、非認知能力とかいわれているような部分。こういったものも強調されているのは、従来の教育論からの違いということとしては、目立つところかなと思います。

例えば、メタ認知、学習方略、自己効力感、レジリエンス、グリット、思いやり、責任感とか、こういったところは、比較的強調されていると思います。ただ、日本の先生からすると、例えば、思いやりとか責任感なんて、これはもう昔からやってきたじゃないかという部分もあるかと思いません。このあたりは、特にヨーロッパとかでは、どっちかという、学校で教えるものというよりは、家庭の役割であって、親が教えるものという意識が強かったところなんです。日本は、もともと、学校教育の守備範囲が広がったので、言葉としては目新しい部分があるとしても、全部が全部、全く新しいということではないと、私も思っています。ただ、中には新しい部分もあるかもしれないので、そこをうまく取り入れていくことが必要かとは思っています。

さて、実はここでも、スキルという言葉が繰り返し出しています。タイトルも21世紀型スキルですし、伝統的なスキル、新しいスキル、ソフトスキル、非認知スキル。スキル、スキルという言葉が繰り返し使っていますけれども、この時期、スキルが非常に注目されました。どっちかという、知識、これまでの教育は知識重視だったんだ、これからはスキルが大事なんだっていうトーンで、スキルっていう言葉が使われていたんです。実は、その名残として、私が勤めていたOECDの部局も、OECD教育局じゃなくて、OECD教育スキル局という名称になんてすね。当時のスキル重視

の雰囲気が残っているんだと思うんですけども、別にスキルを重視することが悪いということでは全くないと思います。

昔の教育は、知識中心であって、知識偏重のものであれば、スキル重視していくというのは当然のことだと思うんです。ただ、問題は、今度はあまりにもスキル偏重になってしまうということです。批判的思考力を身に付けることが大事だ。知識はどうでもいい、二の次だ。知識なんてスマートフォンで、Google 検索すれば、すぐ分かるじゃないか。そんなのどうでもいいんだよ、という

「21世紀型スキル」の特徴	
伝統的スキル	● 認知的スキル(問題解決力、批判的思考力、創造性等)
「新しい」スキル	● ICTスキル、デジタル・リテラシー、データ・リテラシー ● 「ソフト・スキル」、「非認知スキル」 ● メタ認知、学習方略 ● 自己効力感、レジリエンス、グリット ● 思いやり、責任感
一方で「スキル重視」の裏返しとして、「知識軽視」の批判も	

話になってしまうと、それもちょっと違ってくるというところがあります。イギリスなんかでは、かなり早い段階からスキルを重視してきたんですが、その裏返しとして知識を軽視するようになってしまったということで、逆の批判がまた出ていたという状況もありました。

この次のスライドでは、その点に触れているんですが、イギリスの教育省が 2011 年に出したレポートです。2011 年なんで、結構早い段階だと思います。何が書いてあるかという、教科の知識を重視し強調するあまり、教育の発達側面を軽視する教育者がいる。どっちかっていうと、知識重視派の方々ということです。一方では、現代社会の知識の変化を早く学ぶ方法を学習することこそが最優先されるべきである。スキル、コンピテンシー等の開発に重きを置くと。スキル重視派ということです。要は、知識重視派がいるのに対してスキル重視派もいる。

それに対して、じゃあ、イギリス教育省は、どういうスタンスかっていうと、私たちは、二者択一など考えておらず、いずれかの立場でもない。別に知識重視派でも、スキル重視派でもないんだ

と。何かを学習することなしに、独自に学び方を概念化することは不可能である。確かにこれは当たり前ですよ。想像力を伸ばすことが大事だ。確かに、「じゃあ、皆さん自由に想像してみましょ」と先生から言われても、それは子どもたちも困ってしまう。そこには何らかのコンテンツが必要になってくるということだと思います。今の指導要領のベースになった中教審答申、2016 年の 12 月に出たものですけども、実はこれも、結果的にイギリスの轍を踏まえたような形になっています。資質、能力の育成については、三つの柱はあるけれども、これは知識の質や量に支えられていて、学びに向かう力、人間性にしても、思考力、判断力、表現力にしても、それは、知識の質や量がないと機能しませんということを言っています。ある意味、知識の重要性をピン留めしているようなものになっています。

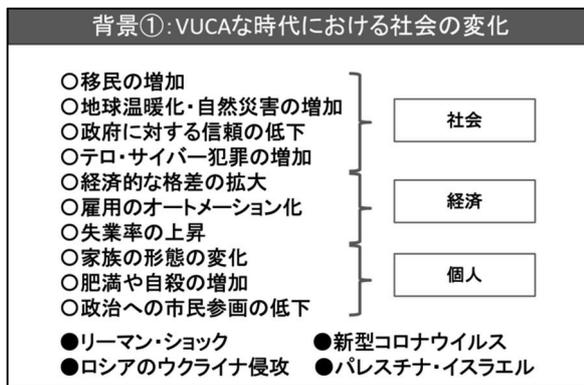
2. Education2030 の背景と考え方

以上が、チャプター1 としての導入部分ということになります。ここから、第2章として、入っていきしたいと思います。この、Education2030 プロジェクトが始まったのは、2015 年でした。ちょうど、私が OECD に着任した年なんですけれども、DeSeCo が出てから 15 年、キー・コンピテンシーが出てから 15 年ぐらいが経過していた。キー・コンピテンシー自体は、そんなに評判が悪くなかったんです。先ほどご説明したように、ニュージーランドとかオーストラリアは、こぞってコンピテンシー・ベースのカリキュラムにしていた。その中で、もう一度、同じようなプロジェクトを始めた理由については、三つほど背景がありました。

まず一つ目が、よく言われる、VUCA という言葉です。変わりやすく不確か、複雑で曖昧。ただ、今は VUCA 時代だといわれるんですけども、個人的には、そんなにこれ重要な言葉かなというふうに思っています。というのは、別に、今から仮に 50 年前にしても、100 年前にしても、150 年前にしても、いつもこんな VUCA な時代だったんじゃないかなと。次に何が起こるかなんて、いつの時代もわからなかったと思うので、この言葉

はそんなに大事ではないかな、とは思っています。

当時、OECDで行ったのは、トレンド分析です。この図の下のほうに書き足しましたけども、例えば、リーマン・ショックであったり、新型コロナであったり、ロシアのウクライナ侵攻だったり、そして今まさに起きている、パレスチナの紛争であったり、将来何が起こるかは分からない。けれども、一方である程度分かることもある。例えば、トレンドとして、ずっと右肩上がりになっていけば、これからも右肩上がりになる可能性は高いだろうし、右肩下がりになっていけば、今後もそうなる可能性は高いだろう。ということで分析をしていくと、上にある白丸のようなこと、例えば移民が増加していく。確かに、日本でも昔より移民の方が増えている感じはします。



あるいは、中段にありますけども、雇用のオートメーション化。AIなんかがどんどん使われるようになって、雇用形態なども変わっていく。例えば、銀行とか、金融業界なんかはこれから労働者が減るだろうといわれていますけれども、そういったところも変わっていくかもしれない。このあたりを背景にしながら、もう一回、これから必要な力というのがどんなものなのか、考えてみようということがありました。

それから二つ目です。DeSeCoのキー・コンピテンシーは、評判は良かったんですけども、いろいろな課題も指摘はされていました。一つは、目標がちょっと分かりにくすぎる。キー・コンピテンシーを身につけるのは、大事だけれども、目標が豊かで責任ある人生につなげて、現状や将来の課題に対応していくとされていて、ちょっと抽象的すぎて分かりにくい。これ、2030では、ウェルビーイングに基づく具体的な指標ということで、

結実をしています。

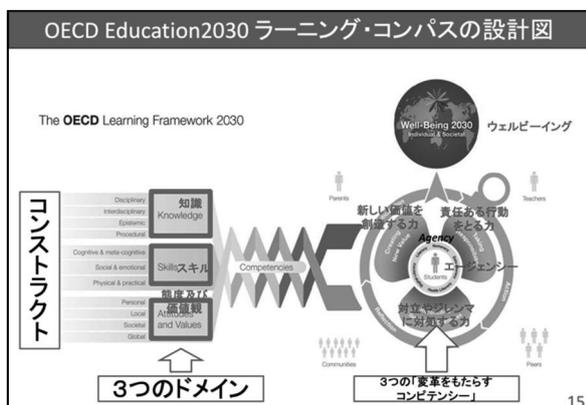
二つ目は、実効性です。DeSeCoは理論的には高い評価だったといわれています。研究者が中心で作ったものなんですけれども、例えば、学校で、授業にどうやって生かしていくのか。先ほどのように、色々な抽象的なフレームワークがあったところで、先生方がそれを授業にどう生かすのか。あるいは、われわれのような行政官が教育行政にどうやって生かしていくのか、といった点が分からなかった。2030では、カリキュラム作りであるとか、教師による指導、そういったところにも連動して検討していきましょうということを考えています。

それから、三つ目が多様性です。DeSeCoは、研究者の人が中心に作られたんですが、国際的にもあまり多様ではなくて、ほとんどヨーロッパ諸国です。ヨーロッパの国々と、あとはオーストラリア、ニュージーランド、アメリカとか、アングロサクソン系の国がほとんどという状況でした。2030は、アジアとか、日本、韓国、とか中国も参加していますし、今、議論があるかもしれません、ロシアとかも参加をしたりもしていました。色々な国が参加していた。DeSeCoのキー・コンピテンシーの策定には、日本は全く参加していません。参加していないので、日本は、できたものがこういうものですよというのを知らされるだけだというのが実情でした。

三つ目です。冒頭で21世紀型スキルの議論をご紹介しましたがけれども、もう一回、振り返ってみたいんですが、スキルとコンピテンシーって、どんな関係なんですか。21世紀型スキルということもあれば、21世紀型コンピテンシーと言ったりする場合があります。これは、タキソノミー、分類学として、どっちが上位なのか。スキルなのかコンピテンシー、どっちが上位なのか。あるいは、ターミノロジー、用語法としても、例えば、社会的スキル、情動的スキル、非認知スキルとか、似たような言葉が、似たような形で使われることが非常に多くて混乱をしていました。このあたりを整理することが必要だろうということで議論し

てきました。

この議論には3年ぐらいかかっているんですけども、たどり着いたのはこの図です。ラーニング・コンパスの「設計図」というふうに呼んでいきますけれども、分かりやすいんじゃないかなと思っています。どうやって読んでいくのかなんですが、右上にあるのはウェルビーイングです、地球の形をしていますけれども、このウェルビーイングを実現するためには、右下にある、これがコンパスなんですけれども。このコンパスにあるような力、すなわち、新しい価値を創造するとか、責



任ある行動をとる、対立やジレンマに対処する力を発揮していった、ウェルビーイングが実現されると。とはいっても、例えば、新しい価値を創造する力と言っても、何のことだか、それだけでは分からないと思います。

それを紐解いていくと、左側にある知識やスキル、それから態度、価値観といったものに、要素分解されます。逆方向から読めば、自分たちが持っている様々な知識やスキル、態度・価値観というものを、場面や文脈に応じて組み合わせて使うことで、新しい価値を創造したり、あるいは、対立やジレンマに対処したり、責任ある行動をとったりして、結果的にウェルビーイングにつながっていくということになります。

私、この図で個人的に好きなのは、真ん中に、紐のようになっている部分です。知識、スキル、態度及び価値観というものを、紐状に組み合わせた形でコンピテンシーが発揮されることになっているんですけども、これこそが、コンピテンシーの定義にあった「モビライズ」、すなわち、組み合わせて使う、結集するっていうことだと思う

んです。

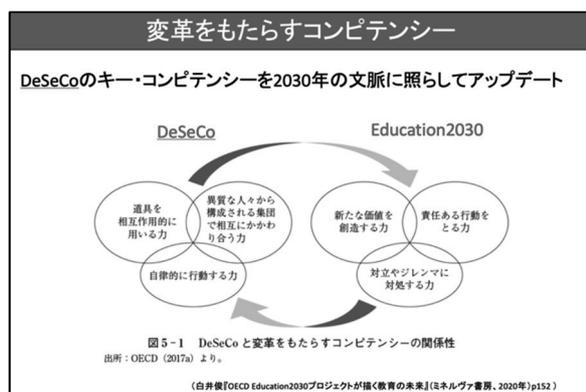
確かに、何かを知っているだけでは、全然、対立やジレンマに対処することできないですよね。例えば、身近な話ですと、最近、外国人の方が色々なところに増えてきていて、例えば生活習慣の違いなんかでトラブルが起きたりすることもあります。騒音問題とかですね。そういうときに、知識として、例えば相手の文化的な背景を知っている。騒音についてもある程度許容するような社会から来ている方であるとか、そういうのを知っているかどうか。知っているだけではしょうがないので、スキルとして相手に対して、「その騒音は、あなたの国では許されたかもしれないけども日本では許されないの、もうちょっと静かにしてください」ということを、論理的にちゃんと表現して伝えられるかどうか。それから、態度及び価値観。相手のことを、「ここは日本だからもう、日本のやり方に従いなさい」などと、頭ごなしに言うだけじゃなくて、日本における価値観を大切にしながらも、相手のこともちゃんとリスペクトしてあげるような態度。こういったことが必要になってくる。それらを組み合わせることによって、結果的に、われわれの生活自体がよくなり、日本社会全体のウェルビーイングにつながっていくということにもなってくるかなというふうに思います。

ちなみに、ここでは、この右側にあるように、新しい価値を創造するとか、変革をもたらすコンピテンシーという、三つの力が提起されているんですが、これらについては、突然、出てきています。その背景を次のスライドでお伝えしたいと思います。

冒頭の DeSeCo のキー・コンピテンシーでも、三つの要素の三角形みたいな図をご紹介しました。書いてあるのは、左側にある、異質な人々から構成される集団が相互に関わり合う力とか、3種類の能力がありました。それが、Education 2030では、ちょっと違う三つに変わっています。実は、これこそがトレンド分析の結果なんですけれども、その理由を簡単にご紹介したいと思います。まず、DeSeCo で道具を相互作用的に用いる力というのがありました。当時、意識されていたのは、例えば、まさにインターネットとか、メールとか出始

めた頃なんです。そういう重要なツールをちゃんと使っていく、もちろん伝統的な媒体である、紙とか、そういうのはもちろんですけれども、それだけでなく色々な道具を使っていく。

ただ、考えてみると、今の子どもたち、中学生、高校生はもちろん、小学生にしても、みんな道具をすごく上手に使っていますよね。SNSとか、スマホ、タブレットも、みんな上手に使えます。そうなってくると、別にそのこと自体が大事というよりも、そこから、どういうふうに新しい価値を作っていくのがということの方が大事じゃないか。要は、大人が作った道具を子どもがそれを上手に使いきなして、ああ、よかったというのではなくて、むしろ、子どもたちがそこに付加価値をつけられ



るのかどうか。新しい道具を自分で開発するとか、新しい使い方を生み出すとか、そういったところまでが必要なんじゃないかということで、「新たな価値を創造する力」に変わっています。

異質な人々から構成される集団で相互に関わり合う力。これも、もちろん、2003年にこのレポートが出ただけでなく、これからも大事なのは変わりません。ただ、これから色々な人々と関わっていくとしても、2003年のときであれば、移民の方もそこまでは多くなかった。そうなってくると、ある程度、何かあつれきが生じたとしても、その場さえやり過ごせば、その場を我慢すれば済んでしまうといったこともあったかもしれない。しかし今は、本当に移民の方々も、日本の社会に根付いていて、生涯過ごしていこうという方も非常に増えています。そうなってくると、単に相互に関わり合って、その場をやり過ごすだけでなく、対立やジレンマなんかも生じてくる。そういう中で、それを解決していくってことが必要になって

くる。ということで、対立やジレンマに対処する力というふうになっています。

左下にある、DeSeCoの自律的に行動する力、これも、もちろん大事です。自律的に行動する、自分の判断で決めていくことは、もちろん大事だと思います。ただ、一方で、例えば地球の環境問題がさらに悪化している。そういう中では、自分の意思も、もちろん大事ではありますが、それと同時に、あるいは、それ以上に、責任ある行動を、他者とか、社会や地球環境にとって責任ある行動をとっていくということも必要になってくるだろうということで、左側のものを別に否定するわけではないんですが、アップグレードするものとして、右側の、この三つの力というものが求められているということです。

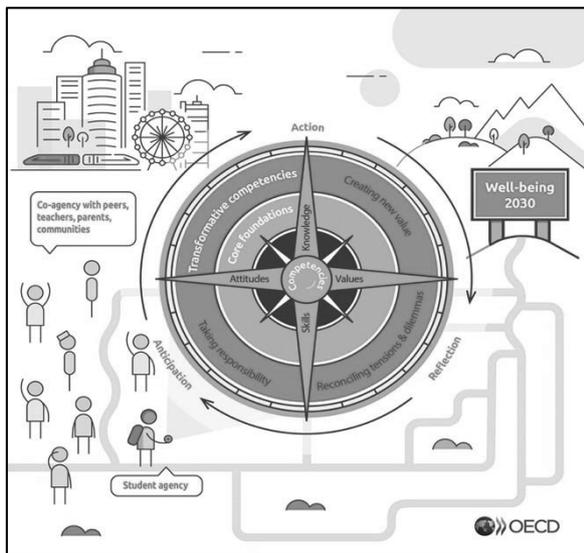
3. ウェルビーイングとエージェンシー

さて、次の第三章からは、今日の本題であるウェルビーイングとエージェンシーというテーマに入っていきたいと思っています。今、スライドに表示しているものが、現時点でのラーニング・コンパスの、おしゃれバージョンというか、公表用に作られたものということになります。

書いてあることは、先ほど、「設計図」としてご紹介したものと同じなんですけれども、ちょっと見た目が変わっています。右側にあるのはウェルビーイングの山でして、ここに登っていく、左下にいる生徒がエージェンシーを発揮して、このウェルビーイングを実現していくというふうに、模式的に描かれています。そのとき、手に持っているのがコンパスで、これはコンピテンシーを集めたものですが、このコンパスを持っているということで、この自分たちの行き先を示していくもの

として比喩的に使っています。

ここでのキーワードは、このウェルビーイングとエージェンシーという二つなんですけれども、まず、このウェルビーイングから考えていきたいと思います。ウェルビーイングは、最近、はやり言葉的に色々なところで使われていますが、別に、誰が元祖・本家かということはないと思っています



す。よく使われるのは、健康な状態である、特に、ヘルス、ウェルネスがある状態を指すことが多いです。それからもう一つが主観的幸福。ハピネスというか、精神的に満足してる状態。ウェルビーイングと言ったときには、この二つをイメージすることが多いかなと思います。

ただ、OECD の議論では、ウェルビーイングをもうちょっと広く捉えています。この健康状態や主観的幸福以外にも、例えばワーク・ライフ・バランス、教育とスキル、社会とのつながり、市民参加とガバナンス、環境の質、個人の安全。それが右側に行くと、お金に関するようなところ、所得と財産、仕事と報酬、住居。これこそが、いかにも先進国の集まりである OECD らしいなという感じがするんですけども。単に、自分は健康だ、あるいは、精神的に幸福だというだけじゃなくて、もっと色々な要素を含むものとして定義されています。

実は、この議論には若干背景があります。2011年にOECDが設立されてから50年を迎えたときに、ミッションの再定義をやりました。もともと、OECDの前身は、第2次大戦でヨーロッパが荒廃

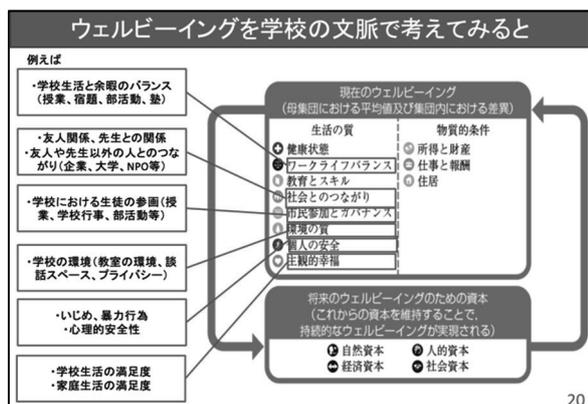
してしまったのを、復興させていくための組織だったんです。ですので、どちらかという経済寄りの機関、名前も「経済協力開発機構」ということで、経済寄りの名前になっています。ヨーロッパの国は、ある程度もう、経済的には高いレベルに達してきた。そういう中で、より大切なことはもっと違う要素なんじゃないか。これを目指していこうということで作られたのが、このウェルビーイングのフレームワークになります。

これは、大人を念頭に置いたものなんですけれども、今日、考えていただきたいのは、これを子ども目線というか、学校目線で考えたらどうなるのかなということです。例えば、ワーク・ライフ・バランス。大人にとってももちろん、ワーク・ライフ・バランス、大事ですけども、子どもたちにとっても、例えば、学校生活と余暇、自由時間といいますか、そのバランスみたいなのはどうなのか。授業とか宿題、部活があって塾があって、もう大変。忙しくて、眠る時間も取れないという子どもたちも結構いると思います。

あるいは、社会とのつながりという項目。子どもたちにとって、例えば、クラスメート、友人との関係であるとか、先生との関係も、もちろん大事だと思うんですけども。一方で、子どもたちと話していると、なんか、世界が狭くて、もっと色々な人と関わりたいです、みたいな声を聞くこともよくあります。例えば、企業で、第一線で働いている方であったりとか、大学で最先端の研究をされてる先生だったりとか、あるいは、NPOで実践されてる方、そういった方なんかとつながりあるのかどうか。

次に、市民参加とガバナンス。大人にとっては典型的には投票行動によって、仮に、今の政治や行政のやり方に不満があれば、それを解決する手段があるわけです。場合によっては、自分たちが選挙に出ることもできるわけですけども、子どもたちはどうなんでしょうか。授業や学校行事、部活とか。選べる部分も中にはあるかもしれない

けども、「参画」という感じは全体的には少ないかもしれません。例えば、来年度のカリキュラムはこれです、今年の授業時間割はこれです、担任の先生はこの先生です、今日の給食はこれですと、色々なことが決められてしまっているかもしれません。選べるものがない。自分で決められものがないとすると、どうしてもオーナーシップ、自分



が参画している、自分が決めていくんだという意識が薄れてしまうかもしれない。

次に、環境です。大人であれば、例えば部屋の雰囲気が暗ければ、壁紙を変えたり、カーテンを変えたり、色々なことができるかもしれません。しかし、子供たちの場合には、ちょっとしたことでも、自分で変えることも難しいかもしれません。教室の環境が暗い、清掃が行き届いてないとか、色々な課題があるかもしれません。

他にも、当然、いじめがないとか、満足しているとか、色々なことがあると思うんですけども、このウェルビーイングの視点をもって、今の学校生活自体を考えてみるだけでも、結構、いろいろ得られるところがあるのかなという気がします。もちろん、大人と子どもを同列に考えることが必ずしも、例えば給料とか、住居とかそういった要素は、同列に考えることできないとしても、学校教育、学校の文脈でも、いろいろ生かせるところがあるのかなというふうに思います。

さてもう一つ、今日の、どちらかと言えば本題ですけども、エージェンシーについてです。図の主役の生徒がエージェンシーを発揮していくことが大前提とされています。そもそも、このエージェンシー、恐らく、今日の先生方も、この言葉にあまりなじみのない方が多いと思います。OECD では、「変化を起こすために自分で目標を

設定し、振り返り、責任を持って行動する能力」と定義されています。これ、ちょっと長くて、もうちょっと短い言葉はないんですかということで、これまでも何年も、色々な方と議論してきたんですけども、近い言葉として、当事者性、当事者意識、自分ごと、責任感、主体性、変革、行動力、実現力などと、色々あるのかもしれません。ただ、あると思うんですが、なかなか、どれか一つ、例えば、当事者意識、それだけでいいのかっていうと、ちょっと足りないような気がします。そのため、取りあえず、片仮名でエージェンシーという言葉を使っています。

このエージェンシーが発揮できているという状態というものもあるんですが、発揮できていない状態を考えるほうが分かりやすいのかなと思って、私がいつもご紹介しているのが、この「重いランドセル問題」です。学校の中には、ちゃんと全部荷物を持って帰りなさいと指示する学校があり、いわゆる「置き勉」は駄目と指導されてる学校があります。そうすると、ランドセルも結構重くて、特に教科書とか何冊も入れたりすると非常に重くなっちゃうんです。それは、発育にも良くないですよということで、色々な人から文部科学省に、何とかならんかみたいな話がかかることがありました。というか、ずっときていたんです。

これをいつまでも繰り返してもしょうがないので、一回、各教育委員会に連絡をしようということで。事務連絡として、ランドセルが重くて子どもたちの発育にも良くないという声があるので、検討してくださいっていう連絡を流したことがありました。そしたら、色々な反応がありました。保護者からは、よく出してくれました、ありがとうございます、みたいなのも言われましたし。教育委員会にいる知人からは、そんなことを文科省が言うまでもなく、うちは、ちゃんと手を打っていますよって、というところもあったりしました。

ただ、いずれにしても、私が思ったのは、なんで、こんなのを文科省がやらなくちゃいけないのかな、ということです。だってこれ、学校レベルで解決できる話です。むしろ、なんで、学校レベルで解決できないのかということ、変えられないと

いう思い込みとかがあったのかなという気がします。実際、変えている学校とか、変えている教育委員会もたくさんあるんです。それにもかかわらず、変えられない学校があるのかというと、結局もう、「先生に言ってもしょうがない」、「どうせ変わらないでしょう」と思っていたりとか、あるいは、そもそも先生に言おうということ自体が思いつかない。自分たちが変えられると思ってないというような、そういう子どもたちも結構、いるように思います。

それこそがエージェンシーの欠如です。ランドセルの問題は、学習というよりは、生活の話かもしれないかもしれませんが、例えば、授業も、自分が算数が分からないのは先生の教え方が悪いんですけど、どうしてふうになってしまうと、非常にもったいないと思うんです。もし、先生が全部を決めちゃっていると、どうしても子供たちが学習に対する所有者意識を持ってないと思うんです。いかにして、先生と一緒につくっていくのか。周りにいる子どもたちも含めて、Co-create、共同でつくっていくということが大事じゃないかと。それこそが、エージェンシーの基本だということがいわれています。

次の資料は、よく、色々な所で引用されていますが、日本財団の意識調査です。自分は責任ある社会の一員だと思うとか、自分で社会を変えられると思うという 18 歳の若者の割合が日本だけ非常に低いということが挙げられています。もう一つが、ちょっと古い TIMSS 調査ですけども、数学とか理科の勉強が楽しいですか、役立ちますか、といった質問に対して日本だけ割合が低いというデータが出ています。そうなってくると、どうも日本の子どもたちが、学校で、色々なことを変えていったり、授業を楽しんだり、教科を楽しんだりということが、弱そうな感じがするということがあります。

ここで考えたいのは、でも、日本って、ずっと「主体性」とをすごく大切にしてきたのではないかということです。主体性とか主体的ということは、「主体的・対話的で深い学び」とか、「主体的に学習に取り組む態度」とか、もう、色々なところで何度も何度も出てきます。にもかかわらず、

どうも主体性があまりあるようには、少なくともこの国際データからは見えないというのがあります。なぜなのかと思うと同時に、そもそも、主体性とは何かかが、よく分からなくなってきました。

二つだけ、ケースをご紹介したいんですが、まずケース 1。ある学校で、中学校なんですけれども、その学年主任の先生と話していたら、うちの学校の生徒は、宿題を忘れずにちゃんと毎日、期日まで提出しているんですと。だから、うちの子どもたちは、非常に主体性が身につけています、という話を伺いました。ああ、そうですか、それは決して悪いことじゃないし、それはすごいですねという話で終わりました。

ケースの 2。これは都内のある高校なんですけど、授業ですごく面白い授業をしていて、ディスカッションをしてたんです。子どもたちが盛り上がってしまって、授業が終わってチャイムが鳴っても帰らない。教室に残って、ずっとディスカッションを続けているんです。先生から帰りなさいって言われて、ようやく帰っていくという状況だったんですが、それを見ていた、隣で見学していた先生が、「いやあ、この子どもたちは主体性が身につけていますね」と言っていました。

ケースの 1 の、ちゃんと期日までに宿題を出している主体性と、ケースの 2 の授業が終わっても自分たちで残ってディスカッションしている主体性。全然違いますよね。そうなってくると、私は、主体性というのが何だかよく分からなくなってしまうと、広辞苑を調べたらこう書いてありました。

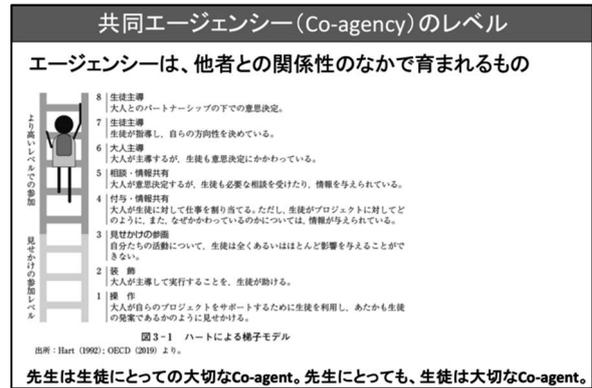
「他の者によって導かれるのではなく、自己の純粋な立場において行う」。確かに、それは主体的なんでしょうけれども、ただ、教育って基本的に先生に導かれることが多いですよね。そうなってくると、じゃあ一体、教育における主体性って何なんだろうと。これだけ主体的・主体性と言いながら、なんだか、分からなくなってきた。分からなくなると、私、いつも国際的というか、英語とかでどういう表現してるんだろうというのが気になってきます。

主体性に相当するような言葉をいろいろ探してみたんです。例えば、activeness 積極性、pro-activeness（先を見越した）積極性、能動性、

autonomy 自律性、independence 独立、自立、individuality 個性、voluntariness 任意性、ownership 当事者意識、responsibility 責任。どれも、近いといえば近いけれども、何か違うかもしれない。先生方に聞いてみると、自分はこの中で選ぶんだったら、自律性、オートノミーだと思えますと言う先生もいれば、プロアクティブだと思えますと言う先生もいたりして、先生の中ですごく割れています。

この主体性をもう一回考えてみる時に参考になりそうなのが、エージェンシー概念です。このエージェンシーの図の中では、実は、さっきご紹介しなかった左側に、主役の生徒を取り囲む、色々な人たちがいます。誰かということも書いてあって、例えば、クラスメート、仲間たちであったり、先生であったり、保護者であったり、地域コミュニティの人々とされています。彼らは Co-agent、共同エージェントと位置付けられていて、一緒にエージェンシーを発揮する人たちというふうになっています。

次のスライドは、ロジャー・ハートの「はしごモデル」というものなんですけれども、共同エージェンシーにも、色々なレベルがあるということを紹介しています。例えば、レベル 1、これ、先生と生徒の関係ですけれども、レベル 1 ですと大人が自らのプロジェクトをサポートするために生徒を利用し、あたかも、生徒の発案であるかに見せかける。ちょっと、悪い言い方ですけども、そこからだんだんレベルが上がって行って、例えばレベル 6 ですと、大人が主導するけれども、生徒も意思決定に関わってる。レベル 8 ですと大人とのパートナーシップのもとで意思決定をしていくということで、だんだん、共同性のレベルが上がっていくということになります。



こうやって考えてみると、当たり前なんですけれども、主体性にも色々なレベルがあるということです。最初の、ケース 1、ちゃんと宿題を出してる主体性、それは、ひよっとしたら、大人がどっちかということと主導しているのかもしれない。うちの子どもたちは、ちゃんと期日までに宿題を出しているんですということで、言い方は悪いかもしれませんが、先生が自らのプロジェクトというか、学校の目標を達成するために使っているということは、言えなくもないかもしれません。ケース 2 の、子どもたちが残ってディスカッションしている。それはひよっとしたら、もうちょっとレベルが高い段階なのかもしれない。多分、色々な場面というのがあると思うんです。

別に、私は、宿題を期日までにさせるのが悪いとは全く思っていないんですけども、ここは先生がリードする場面、ここは生徒と対等な立場で共同する場面、ここは先生がちよっと間接的にサポートしながらも、生徒をリードして行く場面。多分、色々なレベルの段階があるんじゃないかなと思っています。この視点っていうのが、「主体性」という言葉を使ってしまうと、どこか消えてしまう。どこの主体性なのか、どのレベルの主体性なのかっていうのが、明らかでなくなってしまうという気がします。

そこに、この「はしごモデル」を意識すると、少し主体性を深掘りして考えることができるのかなと思います。ただ、誤解がないように申し上げると、はしごモデルがあると、どうしてもレベル 8 のほうを目指そうということになりがちだと思うんですけども、このロジャー・ハート自身も、別にレベル 8 が常に正しいということは全く思っていないということを言っています。彼が言ってい

るのは、こういう、色々なレベルがあるってことを、子どもたちが知ってることが大事なんだということです。先生としても、いや、この場面はレベル1でいくんだよ。ここはレベル6だよっていうことを意識して臨んでいただくのが大事なのかなというふうに思っています。

4. カリキュラム・オーバーロード

さて、残るキーワード、カリキュラム・オーバーロードに入っていきたいと思います。先生方が忙しい、働き方改革が必要だということが言われて久しいんですけども、カリキュラム・オーバーロードというのは、カリキュラムに盛り込む内容が過大になっている状態。たくさんのことを教えてくださいという状態です。当然、先生がたにとっても、生徒にとっても負担になるということがあるんですが、その一方で、いわゆる、「〇〇教育」といわれる、色々なことが学校に求められているという状況が現実にあります。ただ、私も、こういう話を聞いていると、また、教育じゃないところの、例えば、金融界の人だったりとか、税理士会とか、そういった方々から、また、教育にいろいろなご要望をいただくのかな、それも、ちょっと大変なんだよなというふうに思っていたんですが、そうでもないかなという気も最近、というか、何年か前からしています。

というのは、先生方とのやりとり、大体、こういう感じになっているんです。「カリキュラム・オーバーロード、解消しなきゃいけない課題ですね。減らすことには大賛成です」、ということは多くの先生、おっしゃっていただきます。ただ、「じゃあ、先生のご専門、例えば国語、例えば算数だったら、どのあたり削ることができますか」と聞くと、いや、もう国語は大事ですから、これ以上削れませんと。算数はもう、大事ですから、これ以上削れませんと。理科は、いや、もう無理です、社会、無理です、家庭科、無理ですという話になってしまうと。そうすると、もう、何も削れない。一方で、色々な所から色々な要望があるという中で、カリキュラム、増えるしかない。小学校も29コマで無理だったら、もう30コマ、31コマに増やすしかないという状況になってしまいます。

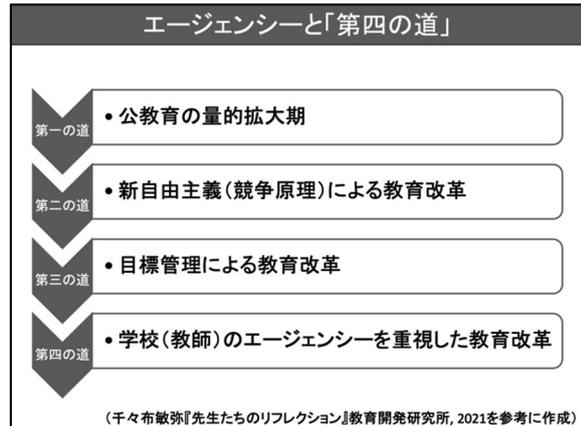
オーバーロードの問題が生じる背景には、実は、この冒頭のコンピテンシーの視点の欠如っていうのがあるんじゃないかなと思ってます。このことがらを扱ってるから、このカリキュラムはいいカリキュラムです。ちゃんとやってると思いますということではなくて、そのことを扱っているかどうかということよりも、その問題に対処できるのかのほうに本当は大事なはずですよ。今、各国は、このコンピテンシー・ベースというか、コンピテンシーを重視したカリキュラムに向けて色々な工夫をしています。例えば、アメリカのこの8+1（エイト・プラス・ワン）。これは、カリキュラムというよりは、一つの提案なんです。エイト・プラス・ワンでは、例えば、全ての物質は原子からできていると。細胞は生命体の基本単位だと。世界は電磁波であふれていると。理科の先生からしたら、こんなの当たり前でしょうと言われてしまうかもしれないけれども、こういった根本的な超重要事項、これをまず押さえる、これだけは押さえてもらうというアプローチをしています。

カナダのブリティッシュ・コロンビア州も最近、結構、注目されていますけれども、実は同じように、ビッグ・アイデアというのがあるんです。ビッグ・アイデアって、ちょっと訳しにくいんですが、重要概念みたいな感じでいいと思うんですが。例えば、全ての生物は環境を感じ取って反応する、エネルギーは変換されるとか。これ、小学校4年生の理科なんですけれども、こういうビッグ・アイデア、ここだけは大事、ここを理解していくと、他の枝葉末節なこともちゃんと理解しやすくなるよという部分を押さえています。

5. これからの教育を考える

最後に、これからの教育を考えるということで、ちょっと大きな話を触れて終わりにしたいと思います。これ、ハーグリーブス先生という方が、提案されているものなんですけれども、エージェンシーと「第4の道」ということで紹介します。これまで、教育には第1から第3の道をたどってきた。第1の道は、まず、戦後混乱期みたいなところであれば、公教育を量的に拡大していく、全国

津々浦々にちゃんと先生、教科書、教室をつくっていくということになってくる。ところが、それが充足されてくると、先生方をもっと競争させなくちゃいけないんじゃないか、学校を競争させなくちゃいけないんじゃないかということで、色々な国が、競争原理を重視するようになってくる。ただ、実際には競争原理だけでは、なかなか、うま



くいかない。

ということで、第3の道、目標管理による教育改革に変わってくる。学校や先生にも一定の裁量みたいのを認めていくわけです。典型的には、PDCAサイクルです。自分たちで目標をつくって、それができているかモニタリングしていくという考えなんですけれども、これも、結局うまくいかないんじゃないかっていうのが、ハーグリーブスの先生の考えです。彼が言うところの第4の道として、学校のエージェンシーを重視した教育改革にこれから変わっていくんじゃないかということを言っています。

一つご紹介したいのは、シンガポールの例です。シンガポールでは、この TLLM、Teach Less, Learn More というので、いわゆるゆとり教育みたいなものですね。学習内容を減らしている。先生にも生徒にもスペース、時間的・空間的なゆとりをつくっていくことが大事なんだってということで、シンガポールは、いわゆる、日本のゆとり教育に相当するようなことを、2005年ぐらいからずっとやっています。日本と比較してみると、日本では、いわゆる、ゆとり教育を導入した後、PISA ショックとかが起きて、今はどっちかというと、ゆとり教育脱却、指導要領もかなり増強してきたという状況になっています。シンガポール

は、TLLM を 2005 年ぐらいから始めてきたんですけれども、ずっと PISA なんかも、ほぼ世界 1 位、全領域でほぼ 1 位というのを続けています。

シンガポールは非常に小さい国です。人口 500 万しかいないので、1 億 2000 万を超える日本とは、単純な比較にはなりませんけれども、この政策として非常に面白いところがあるかなと思います。シンガポールでは、2010 年ぐらいからですけれども、生徒主体のカリキュラム、エージェンシー重視のカリキュラムに変わっているということがあります。シンガポールでは、カリキュラムの 2 割を学校独自に設定する政策を展開しています。先生がたは、海外の先進授業を視察したり、国際学会に参加したりすることを奨励されていると。先生がたの楽しそうな姿が、この短い文章からも見えてきますけれども、トップダウンで指示しても改革できない、だから学校のエージェンシーを育むことに政府としても注力しているんだということのようです。

最後のスライドになりますけれども、OECD の議論の中で、教育のニューノーマルということを示しています。左が、伝統的な教育、別に日本ということではなくて、一般的なという意味なんですけど、1、2、3 のあたりでは、昔の教育、どっちかという教育制度単体で、一部の人が意思決定して、役割分担が良くも悪くも明確化されていると。学級で何か問題が起きたら担任の先生の責任だという感じでしたけれども、ニューノーマルではもうちょっと広く、エコシステムで教育制度を捉える。色々な人が関わって、責任も共有していくという姿が描かれています。また、真ん中の 4、5、6 のあたりですけれども、一昔前はイン

教育のニュー・ノーマル

表 1-1 伝統的な教育とニュー・ノーマルの教育

	伝統的な教育	ニュー・ノーマル(新常态)の教育
(1)	教育制度を単体として捉える	教育制度をより広いエコシステム(生態系)において捉える
(2)	一部の選ばれた人による意思決定	より広い関係者による意思決定
(3)	役割分担	責任の共有 (shared responsibility)
(4)	インプットとアウトカム	インプット、プロセス、アウトカム(特にプロセスの重視)
(5)	生徒の直線的な発達を前提にした、標準化されたカリキュラム	生徒の非線形の発達を前提にした、動的なカリキュラム
(6)	標準化されたテスト中心の評価	「学習のための評価」, 「学習としての評価」を含めた広義の評価
(7)	説明責任とコンプライアンス	システムの改善のためのフィードバック
(8)	(教師の指示の) 聞き手としての生徒	能動的な参加者としての生徒 生徒、教師それぞれがエージェンシーを発揮

出所: OECD (n. d.) に基づいて筆者作成。
(白井俊『OECD Education2030プロジェクトが描く教育の未来』(ミネルヴァ書房, 2020年) p53)

プット、先生が教えて、それを生徒が試験という形でアウトカムしていくと、出していくということでしたけれども。ニューノーマルではプロセスを重視してる。評価も単に合格・不合格、何点っていうだけでなく、次の学習に活かしていくような評価に変えてくるということが提案されています。

そして、何より重要なのは8番目、従来のセミナーや教育では先生の指示の聞き手としての生徒というのが、役割は強かったかもしれませんが、ニューノーマルでは生徒も能動的な参加者で、そして、先生と生徒、それぞれがエージェンシーを発揮していくことが大事だというふうに提案されているということになります。

本日の基調提案ということでは、私からは、以上にさせていただきまして、また後半のディスカッションにつなげていくことができればと思っております。ご清聴、どうもありがとうございました。